



特定非営利活動法人
NPO子どもネットワークセンター

天気村

地球が遊び場だ!

「こんぺいとう自然保育園」の幼児環境教育

代表理事 山田 貴子
事務局長 辻 充子
理事 笹谷 康之
(立命館大学)

1. こんぺいとう自然保育園の経緯

- 1990年 山田貴子、辻充子の体制
- 1991年 マイクロバスで出かける野外保育の「こんぺいとう」を開始
13時まで
- 1994年 笹谷康之 長女を「こんぺいとう」に通わせる
- 1999年 特定非営利活動法人NPO子どもネットワークセンター天気村
15時までの「こんぺいとう自然保育園」に
- 2006年 認可外保育園

2. こんぺいとう自然保育園の枠組み

- 年間スケジュール：現在は105日(学校の休み期間を除く週2.3回)
- 対象児：4月からは2歳半以上、5月以降受け入れは3歳以上
軽度発達障害も受け入れる
- 3歳児まで通い、4歳児(年中)以上は幼稚園への転園が多い
- 滋賀県湖南地域の自然体験スポット：100カ所
- 3月に説明会
- 「小さなケガを繰り返し体験して、大きなケガを防ぐ力をつける」
ことを、説明会や入園式で保護者に説明

3. こんぺいとう自然保育園の方針

- こんぺいとう自然保育園とは・・・
- 外遊びを中心に野外や自然の中で遊んで学ぶ保育です。
- 幼年期に遊ぶことをたくさん体験することにより
遊びを組み立てられる力、または遊びを創造する習慣が
大切であると考えています。
- 大自然に対して「しくまない教育の場」を提供し
小さなケガをたくさん繰り返し体験し大きなケガを防ぐ
野外体験保育です。

4. 自然の中で五感を磨く年間プログラム

(1) 四季

四季を通して外遊びする
山田貴子の頭の中に四季が入っていて、五感に響く旬の場所を臨機応変に訪れる
今日はどんな五感を伸ばそうかなと思って、当日に行き先を決める
生活と密着した、昔からみるとあたりまえの場所に行く
本物のある旬の時期に、子どもを連れて行くことは
作られた商業主義によって、幼稚園・保育園の旬や行事が1ヵ月ほど早すぎる点が問題
例：1ヵ月前から七夕を飾る、恵方巻きを早く出す
まるで原始人類の親が狩猟採集の場に連れて行くように、幼児を旬の場所に連れて行く
年中行事に参加して多世代と交流する



(2) 天候



・本降りの雨：屋根のある場所



・ぐずついた天気：出入りできる場所



・晴れまたは曇り：屋外

(3) ロジェ・カイヨワの遊びの4つの要素

- 偶然、めまいの体験が豊かな自然保育
- 通常の保育園・幼稚園は模倣、偶然、めまいが少ない
- ・模倣：他の人の動きの模倣
- ・競争：あそこまで走ろうの世界



・偶然：虫が出てきた

・めまい：飛んだり跳ねたり



5. 場面を切り替える1日のプログラム

45分程度が集中できる幼児に飽きさせない時間配分
静と動を織り交ぜて場面を切り替える

- (1) 保育ルーム：おもちゃで遊ぶ
- (2) マイクロバス車中：点呼・紙芝居・歌、意識を高める心の準備
- (3) 1カ所目のスポット：外遊び
- (4) マイクロバス車中：人数確認・紙芝居・歌
- (5) 昼食：お弁当を食べる いただきます
山田貴子が中心にキラキラノートを記入 ⇒
山田の近くで遊んでいなかった場合は他のスタッフが後で記入
- (6) 2カ所目のスポット：外遊び
- (7) マイクロバス車中：人数確認・紙芝居・歌
- (8) 保育ルーム：おやつを食べる、おもちゃで遊ぶ、クールダウン

キラキラノートを保護者に渡す
飲食物は保護者が準備する
飲み物が足りないときには天気村のお茶を飲ませることがある
山田貴子がブログを記入



マイクロバス

群れる

昼食

6. 五問を判断できる群(ムレ)の人間関係

五問(時間、空間、瞬間、人間、仲間)を幼児と保育者が自己判断する関係

- 3・4名の保育者で、20人強の幼児を見る
- 保育者の人数が多いと、かえって保育しにくくなる
- 3名で24人ほど見るときは、目の行き届きやすい自然体験スポットで、
幼児にいつもよりセーブするように伝えと、幼児も理解して行動する

プレイリーダーは山田貴子

- ・山田一幼児：多くの幼児が山田貴子の周りに群れる
「お母さんといっしょやで」と言って、山田が幼児につぶやくこともある
山田から今まで離れていた子も、ときに近寄ってくる
初めて見た母親は、普段は見せない我が子の躍動的姿に驚く
- ・他の保育者一幼児：何人かの幼児が保育者の周りに群れるとともに、
小さくてまだうまく遊べない子ども、動きが少ない子などのフォローをする
- ・幼児一幼児：自由に散らばりながらも、相互に見回して、あまりに離れすぎ
ないようにしている
- ・5月以降の新人には他の子が教える
- ・軽度発達障害児：慣れてくると、群から変に離れる行動もなく、観察者は
誰が軽度発達障害児かわからない

7. 4月のならし保育

移動時間が短く、見通しがきく、少し狭い自然体験スポットに行く
保育者が多め

幼児にとって初めての経験

密接な母子関係の中において、始めて親元を離れる
バリアフリーな自宅・街に慣れて、自然も同じだと思っている
テレビの中の世界のように、飛べるものだと勘違いする
よたよたして、坂を歩けない

4・5回で慣れる

8. 保護者の意識

小さいころは思いっきり遊ばせたいという意識のある保護者が預ける
2000年まで：自然の中で遊んだ体験が多く、自分の教育観を持った母親が多い
2000年から：自然の中で遊んだ体験が少なく、遊び方を知らない母親が増えた
近年：情報過多もあるのか、こだわりが強い親が出てきた
例：遊び、食、放射能などを包括的に捉えて行動する
例：甘味料入りの食、アイスクリームを幼児に食べさせない
例：年中から森の幼稚園に通わせる親もある
「森の幼稚園」の子のエピソード
「森の幼稚園」では、自分でやりたいことを決めているので、
「みんなはいっしょのことをしなくていいんだよ」と子どもがいう
「森の幼稚園」の子は、うるしに触らないなどの教育が徹底

9. 「しくまない」保育(今を生きる)

幼児は22年間変わっていない
「しなさい」という指示はしない
体験的に覚える 子どもの好奇心を折らない
「じょうぶな頭と、かしい体」(五味太郎)に近い考え方
・言われたことを鵜呑みして動くのではなく、自分で考え判断する頭
・やるときはやるが、さぼるときはさぼる、力配分を判断できる体
自宅の周りに自然が少なくなったので、移動保育が重要と考えている
・施設を造るまちづくり ⇒ 移動して自然や既存施設を使うまちづくり
・高齢者の移動ケアの保障だけ ⇒ 子どもの移動遊びも保障する
●環境教育、発達心理、脳科学、進化心理、その他専門的に見て、
どのように解釈できるのか?